

〔原著〕

多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）の作成

関 東 短 期 大 学：桑原 千明
筑波大学大学院人間総合科学研究科：関口 雄一
筑 波 大 学 人 間 系：濱口 佳和

Construction of multi-dimensional scales of relational aggression
for elementary school children (teacher rating form)

Chiaki Kuwabara, Yuichi Sekiguchi and Yoshikazu Hamaguchi

問題と目的

仲間からの暴力やいじめなどの攻撃行動は、今日の児童が直面している大きな問題と言える。長い間、児童の攻撃行動に関する研究は、主に男子における身体的攻撃（physical aggression）や言語的攻撃（verbal aggression）といった顕在性攻撃（overt aggression）を対象とするものが多かった（Crick & Grotpeter, 1995）。しかし、近年、攻撃の対象となる児童との関係性の撤回の脅しや標的児の社会的評価への誹謗などにより害をなす、関係性を志向した攻撃行動に対する研究が米国を中心になされるようになった（Card, Stucky, Sawalani, & Little, 2008）。この「他児の友人関係や、仲間集団の中に含まれているという気持ちに、重大なダメージを与えることを意図した行動」という関係性に志向した攻撃形態は、関係性攻撃（relational aggression）と呼ばれている（Crick & Grotpeter, 1995）。関係性攻撃の具体的な行動には、無視（ignoring）、関係操作（relational manipulation）、悪意のある噂（malicious gossip）、社会的排除（social exclusion）が含まれるとされている（Crick & Grotpeter, 1995; French, Jansen, & Pidada, 2002）。

元々、関係性攻撃は女子に顕著にみられる攻撃行動と想定されたものであり、実際に女子が男子よりも関係性攻撃の得点が高いことを報告

する研究がある（Crick & Grotpeter, 1995）。しかし、この結果は発達段階や文化、測定方法により一貫しないことも示されている（Ostrov, Massetti, Stauffacher, Godleski, Hart, Karch, Mullins, & Ries, 2009）。現在米国では、仲間評定や教師評定など複数の測定方法を同時に用いて、関係性攻撃を測定することが一般的となっている。

また、関係性攻撃への従事と心理社会的不適応との関連を示した研究も多い。特に、幼児期から青年期の発達段階に共通して、関係性攻撃への従事が仲間からの拒否（peer rejection）と関連することが示されている（Crick, Ostrov, Burr, Cullerton-Sen, Jansen-Yeh, & Ralston, 2005; Werner & Crick, 1999, 2004）。さらに、関係性攻撃の遂行は、身体的攻撃を統制した上でもなお、内在化問題や外在化問題、孤立、境界性パーソナリティ障害傾向など多様な心理社会的不適応との関連が指摘されている（Crick & Grotpeter, 1995; Crick, Ostrov, & Werner, 2006; Crick, Murray-Close, & Woods, 2005; Murray-Close, Ostrov, & Crick, 2007）。

上述の通り、関係性攻撃についての研究は米国を中心に実施されており、本邦における児童を対象とした関係性攻撃の研究蓄積は未だに少ない。本邦の関係性攻撃を測定する児童用の尺度には、自己評定式の小学生用 P-R 攻撃性質問紙や仲間評定尺度がある（勝間・山崎、

2008; 坂井・山崎, 2004)。しかし、これらの尺度は関係性攻撃の代表的な行動である「無視」に該当する項目が含まれていないということや全項目逆転項目で構成されているといった問題点がある。さらに、本邦における児童の関係性攻撃研究では、能動的（道具的）攻撃（proactive (instrumental) aggression）、反応的攻撃（reactive aggression）といった攻撃行動の機能面の分類に基づく検討が不十分である。能動的攻撃とは、目的志向的で冷静な攻撃行動であり、情動や生理学的な覚醒を伴わない攻撃行動である（Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987）。一方、反応的攻撃とは相手からの挑発や欲求不満の知覚に対する報復や防御的な反応であり、情動や生理学的な覚醒、敵意帰属バイアス（hostile attribution bias）との関連が指摘されている攻撃行動である（Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987）。坂井・山崎（2004）は、関係性攻撃を道具的攻撃の範疇にある攻撃性と捉えており、関係性攻撃は反応的な要素が少ない攻撃行動と概念化している。しかし、能動の関係性攻撃と反応的关系性攻撃に異なる心理社会的適応との関連がみられることが指摘されるようになり（Marsee & Frick, 2007）、関係性攻撃を機能面から区別し、個別に検討することの重要性が指摘されている（Mathieson & Crick, 2010）。よって本邦においても、関係性攻撃の両機能面を考慮にいたした尺度の開発が求められると考えられる。

以上のように、本邦においては関係性攻撃の概念が未だに包括的に扱われていない状況である。そのため、関係性攻撃の遂行が児童の心理社会的適応に与える影響の全体像が不明瞭なままとなっていると考えられる。実際、児童を対象に関係性攻撃と抑うつとの関連を検討した研究では、女子においてのみ関係性攻撃と抑うつに負の関連がみられるという先行研究と矛盾する結果が示されている（坂井・山崎, 2003）。さらに言えば、海外においても、関係性攻撃を具体的な行動の観点から多次元性を想定して概念化が行われていない状況である。そこで、本研究では、先行研究で作成された関係性攻撃を測

定する尺度の項目、そして、いじめの手記に記載された関係性攻撃と考えられるいじめの手口を参考に、関係性攻撃を具体的な行動から包括的に概念化する試みを行うこととした。さらにこの概念化の試みより想定された複数の領域から関係性攻撃を多面的に測定する尺度を作成するための予備的段階として、児童用関係性攻撃教師評定尺度を作成することを目的とした。より具体的には、以下の二点の目的を達成することが本研究の目的となる。第一の目的は、想定された領域に該当する行動が実際に見られる妥当な項目かどうかを検討し、さらに性差を検討することである。そして、第二の目的は、項目の妥当性や性差の結果を考慮に入れ、選定した項目から児童用関係性攻撃教師評定尺度を作成することである。これらの目的を達成するために、本研究では、小学校教員を対象として児童用関係性攻撃尺度案に回答を求めた。

方 法

調査対象者 日本全国の小学校教員101名（男性52名、女性49名：20歳代17名、30歳代21名、40歳代22名、50歳代39名、60歳代以上2名）を対象とした。

調査時期 2011年3月に実施した。

調査方法 株式会社NTTレゾナンスのgooリサーチのモニターを用いたインターネットによる質問紙調査を実施した。

調査内容

（1）フェイスシート：対象者の性別、年代、教職歴、公立私立区分について尋ねた。

（2）想起児童の基本属性を尋ねる項目：対象者自身が比較的最近受け持った児童の中で、無視、仲間外れ、陰口・噂の流布などの行為を最もよく行っていた児童を1名想起させ、その児童について、性別、学年、関わった時期を尋ねた。

（3）多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）項目案：先行研究（e.g. Crothers, Schreiber, Field, & Kolbert, 2009; 磯部・菱沼, 2007; Linder, Crick, & Collins, 2002; Little,

Jones, Henrich, & Hawley, 2003; 坂井・山崎, 2004; 櫻井・小浜・新井, 2005; Vernberg, Jacobs, & Hershberger, 1999) で作成された関係性攻撃を測定する尺度の項目およびいじめに関する手記（鹿児島県弁護士会いじめ体験文集発行委員会1997; もり, 2002; 原, 1997; 桜井, 1998; 土屋・土屋, 1993）を参考に、本研究において独自に作成した。「A. 噂の流布（8項目）」、「B. 陰口（5項目）」、「C. 操作（33項目）」、「D. 同調する（9項目）」、「E. 社会的排除（11項目）」、「F. 無視（13項目）」、「G. 負のステイグマ（1項目）」からなる80項目で、「まったくあてはまらない（1）」、「あまりあてはまらない（2）」、「どちらともいえない（3）」、「すこしあてはまる（4）」、「よくあてはまる（5）」の5段階での評定を求めた。

結 果

I-1. 多次元性項目による現状把握：想起児童の基本属性 「仲間に対する無視・仲間外れ・陰口というような行動が目立つ児童」の想起を求めた際、対象者のうち特定児童を想起できたのは85.3%（76名）であった。想起児童の性別は、男児が23名、女児が53名であり、学年は1～3年生が9名、4～6年生が67名であった。

I-2. 多次元性項目による現状把握：上位出現領域と性差の検討 多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）項目案80項目について、（平均値－1標準偏差）の値を基準とした床効果の検討、および度数の偏りについて検討を行ったところ、いずれの項目にも床効果、度数の著しい偏りは認められなかった。さらに、項目ごとに性差の検討を行うために、*t*検定を行った（Table 1）。有意な性差が認められた項目は、80項目中6項目で、「B. 陰口」、「C. 操作」、「D. 同調する」、「E. 社会的排除」の領域に含まれる行動であり、いずれも女児のほうが高かった。また、平均値上位22項目に注目すると、もっとも教師に確認されやすい行動は「B. 陰口」領域の行動であり、次いで「E. 社会的排除」領

域の行動であった。

II-1. 因子分析を用いた尺度作成：多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）原版の作成 領域A～Fの各領域の項目中、平均値が高いものから3項目、合計18項目を選定し、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、固有値1以上の2因子が抽出され、因子の解釈から2因子解が適当であると判断された（Table 2）。いずれの項目も、因子負荷量の絶対値が.40以上であることが確認された。第1因子は11項目からなり、「きらいな子を見無視する」「友だちとの間でムカついたことを、他の子に話す」などの項目に高い因子負荷量を示し、特定の子どもをターゲットにして、無視、仲間はずれ、陰口などの手口で意図的・積極的に仲間集団からの孤立化を促す行為群と考えられるため「孤立化」と命名した。第2因子は7項目からなり、「友だちが誰かをからかったとき、一緒になってくすくすと笑う」、「人から聞いた友だちについてのうわさを広める」などの項目に高い因子負荷量を示し、友達が行う関係性攻撃に便乗して加担する行為群と考えられるため、「追従的關係性攻撃」と命名した。2因子間の相関は.71であった。

II-2. 因子分析を用いた尺度作成：多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版：MRAS-ET）の作成 さらに、本尺度が教師評定であることを考慮し、可能な限り少ない項目数での尺度構成を試み、多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版：MRAS-ET）を作成した。まず多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）原版の第1因子に.70以上、第2因子に.60以上の因子負荷量を示した9項目を選定した。次に、この9項目について因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。その結果、固有値1以上の2因子が抽出された（Table 3）。第1因子、第2因子とも、1回目と同様の因子構造となることが確認されたため、第1因子を「孤立化」、第2因子を「追従的關係性攻撃」と命名した。2因子間の相関は.60であった。次に、下位尺度ごとに信頼性係数として α 係数を算出したところ、「孤立化」では $\alpha = .93$ 、「追従

的關係性攻撃」では $\alpha=.90$ であり、ともに高い信頼性が確認された。

因子分析の結果に基づいて、各因子について下位尺度得点を算出した。得点が高いほど、その因子の關係性攻撃行動がよく行われていることを示す。それぞれの因子について、全体および男女別に理論的な得点分布の最小値と最大値、および平均値、標準偏差を算出した(Table 4)。また下位因子ごとに性差の検討を行うために t 検定を行ったところ、2下位因子とも性差は認められなかった。

考 察

本研究の第一の目的は、先行研究といじめ被害についての手記を分析して得られた關係性攻撃7領域に該当する行動が現実の児童の仲間關係においてどの程度見られる項目かどうかを検討することであった。全国の小学校教員101名を対象に、80項目の多次元性關係性攻撃尺度(教師評定・小学生版)原版が作成された。自分が受け持った経験のある児童の中から、無視、仲間外れ、噂の流布などの行為が目立つ子どもを1名想起させ、評定させたところ、80項目中平均値の高かった上位22項目には、もともと項

Table 1 多次元性關係性攻撃尺度(教師評定・小学生版)項目案の平均値および性差

領域	項目	全体		男子		女子		性差	
		<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>t</i> 値	(<i>df</i>)
E	きらいな子を友だちグループに入れないようにする	4.34	(1.053)	4.26	(1.176)	4.38	(1.004)	-0.44 (74)	<i>n.s.</i>
B	友だちについて意地悪なことを言う	4.08	(1.117)	4.09	(1.164)	4.08	(1.107)	0.04 (74)	<i>n.s.</i>
C	友だちに自分がきらいな子のことを無視しようと言う	4.00	(1.254)	3.65	(1.434)	4.15	(1.150)	-1.61 (74)	<i>n.s.</i>
C	他の子が自分のきらいな子と一緒に遊ぶのをやめさせようとする	3.99	(1.205)	3.57	(1.308)	4.17	(1.122)	-2.05 (74)	$p<.10$
F	きらいな子を無視する	3.99	(1.270)	3.87	(1.456)	4.04	(1.192)	-0.53 (74)	<i>n.s.</i>
F	きらいな子には話しかけない	3.96	(1.259)	4.04	(1.296)	3.92	(1.253)	0.38 (74)	<i>n.s.</i>
F	気に入らない友だちには、冷たくする	3.96	(1.227)	3.87	(1.325)	4.00	(1.193)	-0.42 (74)	<i>n.s.</i>
F	友だちが自分のしてほしいことをしてくれないと、つまらなそうにする	3.95	(1.153)	3.96	(1.147)	3.94	(1.167)	0.05 (74)	<i>n.s.</i>
B	友だちとの間でムカついたことを、他の子に話す	3.92	(1.294)	3.52	(1.410)	4.09	(1.213)	-1.80 (74)	$p<.10$
B	友だちについて意地悪なことを言う	3.91	(1.168)	3.78	(1.126)	3.96	(1.192)	-0.61 (74)	<i>n.s.</i>
E	友だちみんなで遊びに行く時、きらいな子だけ誘わない	3.89	(1.250)	3.74	(1.389)	3.96	(1.192)	-0.71 (74)	<i>n.s.</i>
D	友だちが悪口を言ったとき、一緒に悪口を言う	3.89	(1.250)	3.78	(1.313)	3.94	(1.231)	-0.51 (74)	<i>n.s.</i>
E	きらいな子はグループ活動から仲間外れにする	3.86	(1.240)	4.04	(1.147)	3.77	(1.281)	0.87 (74)	<i>n.s.</i>
C	自分のきらいな子が来たら、他の子を誘って別の場所に行く	3.78	(1.292)	3.91	(1.240)	3.72	(1.321)	0.61 (74)	<i>n.s.</i>
E	友だちみんなで遊びに行く時、きらいな子だけ誘わない	3.78	(1.184)	3.87	(1.180)	3.74	(1.195)	0.45 (74)	<i>n.s.</i>
C	友だちに自分がきらいな子と仲良くしないように言う	3.75	(1.223)	3.57	(1.376)	3.83	(1.156)	-0.87 (74)	<i>n.s.</i>
D	友だちが誰かをからかった時、いっしょになってくすくすと笑う	3.75	(1.287)	3.65	(1.335)	3.79	(1.276)	-0.43 (74)	<i>n.s.</i>
E	きらいな子が来ると、急にだまったり、こそこそと話をすることがある	3.75	(1.297)	3.22	(1.445)	3.98	(1.168)	-2.43 (74)	$p<.05$
B	友だちの悪口をその子のいないところで言う	3.75	(1.256)	3.13	(1.290)	4.02	(1.152)	-2.98 (74)	$p<.01$
A	友だちについてのうわさを自分から流す	3.72	(1.302)	3.61	(1.469)	3.77	(1.235)	-0.50 (74)	<i>n.s.</i>
E	みんなでいる時に、きらいな子にだけわざと話さないことがある	3.70	(1.233)	3.74	(1.356)	3.68	(1.189)	0.19 (74)	<i>n.s.</i>
C	自分がきらいな子を友だちグループに近づかせない	3.64	(1.344)	3.61	(1.530)	3.66	(1.270)	-0.15 (74)	<i>n.s.</i>

Table 2 多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）原版に対する因子分析結果

領域	項目	第1因子	第2因子	M	(SD)
孤立化					
F	きらいな子を見無視する	1.068	-.285	3.99	1.270
B	友だちとの間でムカついたことを、他の子に話す	.832	.001	3.92	1.294
E	友だちみんなで遊びに行く時、きらいな子だけ誘わない	.806	.001	3.89	1.250
C	他の子が自分のきらいな子と一緒に遊ぶのをやめさせようとする	.791	.001	3.99	1.205
C	友だちに自分がきらいな子であることを無視しようと言う	.724	.150	4.00	1.254
E	きらいな子を友だちグループに入れないようにする	.717	.001	4.34	1.053
F	気に入らない友だちには、冷たくする	.624	.234	3.96	1.227
D	友だちが怒っている相手に対して、一緒になって怒る	.574	.158	3.47	1.331
A	友だちについてのよくないうわさを自分から流す	.502	.332	3.72	1.302
E	きらいな子が来ると、急にだまったり、こそこそと話をすることがある	.483	.266	3.75	1.297
B	友だちについて意地悪なことを言う	.464	.382	4.08	1.117
追従的関係性攻撃					
D	友だちが誰かをからかった時、いっしょになってくすぐすと笑う	-.195	1.062	3.75	1.287
A	人から聞いた友だちについてのうわさを広める	-.198	1.061	3.50	1.238
D	友だちが悪口を言ったとき、一緒に悪口を言う	.240	.632	3.89	1.250
F	きらいな子には話しかけない	.236	.594	3.96	1.259
B	友だちの悪口をその子のいないところで言う	.270	.558	3.75	1.256
C	自分のきらいな子が来たら、他の子を誘って別の場所に行く	.289	.536	3.78	1.292
A	友だちについてのうわさを自分から流す	.384	.458	3.59	1.328
因子間相関			.71		

A. 噂の流布, B. 陰口, C. 操作, D. 同調, E. 社会的排除, F. 無視, G. 負のスティグマ

Table 3 多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版：MRS-ET）

領域	項目	第1因子	第2因子	全体 M	(SD)
孤立化 ($\alpha=.93$)					
F	きらいな子を見無視する	.948	-.180	3.99	(1.262)
C	他の子が自分のきらいな子と一緒に遊ぶのをやめさせようとする	.840	-.040	3.99	(1.198)
B	友だちとの間でムカついたことを、他の子に話す	.790	.075	3.92	(1.285)
C	友だちに自分がきらいな子であることを無視しようと言う	.773	.133	4.00	(1.246)
E	友だちみんなで遊びに行く時、きらいな子だけ誘わない	.758	.097	3.89	(1.242)
E	きらいな子を友だちグループに入れないようにする	.754	.059	4.34	(1.046)
追従的関係性攻撃 ($\alpha=.90$)					
D	友だちが誰かをからかった時、いっしょになってくすぐすと笑う	-.080	1.007	3.75	(1.279)
A	人から聞いた友だちについてのうわさを広める	-.040	.940	3.50	(1.230)
D	友だちが悪口を言ったとき、一緒に悪口を言う	.305	.569	3.89	(1.242)
因子間相関			.60		

Table 4 各下位尺度得点の分布と平均値および標準偏差

	最小値	最大値	全体			男児			女兒			性差	
			N	M	(SD)	N	M	(SD)	N	M	(SD)	t 値	(df)
F1: 孤立化	6	30	76	24.1	(6.28)	53	24.8	(5.98)	23	22.6	(6.83)	-1.40	(74) n.s.
F2: 追従的関係性攻撃	3	15	76	11.1	(3.46)	53	11.3	(3.35)	23	10.8	(3.74)	-0.53	(74) n.s.
尺度全体	9	45	76	35.3	(8.44)	53	36.1	(8.48)	23	33.4	(9.57)	-1.20	(74) n.s.

目数の少なかった負のスティグマを除き、社会的排除、操作、陰口、無視を中心に6領域すべてに亘る項目がまんべんなく含まれた。本研究において想定された領域は、学級担任が認知する児童の関係性攻撃の行動領域としてはほぼ妥当であったと言えよう。特に平均評定値で3.90以上を示した上位10項目には、排除、陰口、無視の3領域の行動がすべて含まれており、Crick & Grotpeter (1995) など想定されていた行動が日本の児童においても代表的な行動であることが再確認された。

本研究の第二の目的は、選定した項目から教師評定による多次元性の児童用関係性攻撃尺度を作成することであった。最初は18項目を対象に、次いで、項目数を減らして因子分析を行ったが、いずれにおいても、孤立化と追従的關係性攻撃と解釈される2つの因子が抽出された。孤立化は無視、陰口、排除、操作、噂の流布といった関係性攻撃の多様な手口から構成されているもので、基本的に行為者自身が自分の意志で単独あるいは他者に働きかける仕方での特定の人物に対する関係性攻撃を始発するという特徴がある。Crick & Grotpeter (1995) や坂井・山崎 (2004) など仲間評定や自己報告測度で測定されてきた関係性攻撃の尺度と対応する内容のものと考えられる。一方、追従的關係性攻撃は、「(友達と) 一緒になってくすくす笑う」とか「(友達と) 一緒に悪口を言う」、「人から聞いた噂を広める」など、他者が始発した関係性攻撃に同調し加担する特徴がある。櫻井他 (2005) は、中学生用の自己報告形式の関係性攻撃尺度を作成する際に、加害者自身が始発者となるよう操作されて行う関係性攻撃とを区別して個人差を測定しようと試みた。本研究で得られた追従的關係性攻撃の因子は、櫻井他 (2005) の言う「誰かに操作されて行う関係性攻撃」と類似した因子である。櫻井他 (2005) では因子として抽出されなかったが、今回は一つの独自の因子として抽出された。櫻井他 (2005) が指摘したように、こうした追従的な関係性攻撃は、自らが始発者となるよう関係性攻撃とは

異なるものであることが示されたと言えよう。櫻井他 (2005) で抽出されなかった因子が今回抽出されたのは、実際に行われている関係性攻撃をより客観的な視点から観察できる教師が評定する尺度であったということが一因となっているかもしれない。教師は受け持ちの子ども達の問題行動を指導する立場上、問題行動の始発者(つまり首謀者)と単なる同調者を識別する見方を身につけている可能性がある。そうした認知構造の分化により、追従的關係性攻撃が単独の因子として分離されたのかもしれない。なお、尺度の信頼性はいずれの因子においても高く十分に使用に耐える水準にあると言えよう。

関係性攻撃の性差については、今回は明確な結果が得られなかった。80項目すべてに亘って性差を検討したところ、6項目を除き殆ど有意差が見られなかった。性差が認められた場合はすべて男児よりも女児が高く、関係性攻撃を女性に優勢に見られるとするCrick & Grotpeter (2005) と一致する方向での性差であった。しかし、80項目中性差が見られたのはわずか6項目であることを考えると、本邦においては教師評定を用いた場合でも、関係性攻撃の性差は明確でないとの方がより妥当なように思われる。事実、最終的に完成された尺度の得点においても、孤立化と追従的關係性攻撃のいずれについても有意な性差は見られなかった。性差が見られないという結果は自己報告測度を用いた坂井・山崎 (2004) と一致している。日本は相互協調的自己観の高い文化的背景を持つが、こうした文化圏においては、標的の対人関係にダメージを与える関係性攻撃は性別によらず有効であるために、使用頻度に差がなくなるものとも考えられる。今後はさらに多くのデータを収集し、引き続き性差の検討を行うべきであろう。

最後に今後の課題について述べる。まず本研究においては尺度の妥当性の検討が行われていない。そこで今後は、本研究で開発された尺度と同時に、自己報告測度、仲間評定測度、行動観察など教師評定と異なる方法によって関係性攻撃の個人差を測定し、関連を検討するこ

と、そして本研究の尺度と身体的攻撃や言語的攻撃、間接的攻撃など他の攻撃性尺度との関連や、仲間内地位、反社会的行動傾向など社会的適応を測定する他の指標との関連を検討し、併存的妥当性の検討を行うことが必要である。さらに、本研究で明らかにされた「孤立化」と「追従的關係性攻撃」の2側面が、子ども達の心理社会的適応のどのような側面とそれぞれ分化して結びつくのか、子ども達の問題行動や不適応に対して、どのような特異的な関連性を示すのかを明らかにすることが望まれる。

引用文献

- Card, N. A., Stucky, B. D., Sawalani, G. M., & Little, T. D. (2008). Direct and indirect aggression during childhood and adolescence: A meta-analytic review of gender differences, intercorrelations and relations to maladjustment. *Child Development*, 79, 1185-1229.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1996). Social information processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, 67, 993-1002.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- Crick, N. R., Murray-Close, D., & Woods, K. A. (2005). Borderline personality features in childhood: A shorter-term longitudinal study. *Development and Psychopathology*, 17, 1051-1070.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., Burr, J. E., Cullerton-Sen, C., Jansen-Yeh, E. A., & Ralston, P. (2006). A longitudinal study of relational and physical aggression in preschool. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 27, 254-268.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, and children's social- psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34, 131-142.
- Crothers, L. M., Schreiber, J. B., Field, J. E., & Kolbert, J. E. (2009). Developmental and measurement through confirmatory factor analysis of the young adult social behavior scale (YASB): An assessment of relational aggression in adolescence and young adulthood. *Journal of psychoeducational assessment*, 27, 17-28.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1146-1158.
- French, D. C., Jansen, E. A., & Pidada, S. (2002). United States and Indonesian children's and adolescents' reports of relational aggression by disliked peers. *Child Development*, 73, 1143-1150.
- 原くるみ (1997). 14歳の私が書いた遺書—いじめ被害少女の手記— 河出書房新社
- 磯部美良・菱沼悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連 パーソナリティ研究, 15, 290-300.
- 鹿児島県弁護士会いじめ体験文集発行委員会 (1997). 叫び—いじめ体験文集 南日本新聞社 (鹿児島).
- 勝間理沙・山崎勝之 (2008). 児童の関係性攻撃における自己評定と仲間評定の比較 心理学研究, 79, 263-268.
- Linder, J. R., Crick, N. R., & Collins, W. A. (2002). Relational aggression and victimization I young adults' romantic relationships: Associations with perceptions of parent, peer, and romantic relationship quality. *Social Development*, 11, 69-86.
- Little, T. D., Jones, S. M., Henrich, C. C., & Hawley, P. H. (2003). Disentangling the "whys" from the "whats" of aggressive behavior. *International Journal of Behavioral Development*, 27, 122-133.
- Marsee, M. A., & Frick, P. J. (2007). Exploring the cognitive and emotional correlates to proactive and reactive aggression in a sample of detained

- girls. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 35, 969-981.
- Mathieson, L. C. M., & Crick, N. R. (2010). Reactive and proactive subtypes of relational and physical aggression in middle childhood: Links to concurrent and longitudinal adjustment. *School Psychology Review*, 39, 601-611.
- もりるのん (2002). いじめられっ子は格好いい 健文館
- Murray-Close, D., Ostrov, J. M., & Crick, N. R. (2007). A short-term longitudinal study of growth of relational aggression during middle childhood: Associations with gender, friendship intimacy, and internalizing problems. *Development and Psychopathology*, 19, 187-203.
- Ostrov, J. M., Massetti, G. M., Stauffacher, K., Godleski, S. A., Hart, K. C., Karch, K. M., Mullins, A. D., & Ries, E. E. (2009). An intervention for relational and physical aggression in early childhood: A preliminary study. *Early Childhood Research Quarterly*, 24, 15-28.
- 坂井明子・山崎勝之 (2003). 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響 学校保健研究, 45, 65-75.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, 75, 254-261.
- 桜井愛 (1998). いじめとの九年戦争 桐書房
- 桜井良子・小浜駿・新井邦二郎 (2005). 中学生における関係性攻撃傾向の検討－同調行動及び学校適応感の関連 筑波大学発達臨床心理学研究, 17, 39-44.
- 土屋 怜・土屋 守 (1993). 私のいじめられ日記 青弓社
- Vernberg, E. M., Jacobs, A. K., & Hershberger, S. T. (1999). Peer victimization and attitudes about violence during early adolescence. *Journal of Clinical Child Psychology*, 28, 386-395.
- Werner, N. E., & Crick, N. R. (1999). Relational aggression and social-psychological adjustment in a college sample. *Journal of Abnormal Psychology*, 108, 615-623.
- Werner, N. E., & Crick, N. R. (2004). Maladaptive peer relationships and the development of relational and physical aggression during middle childhood. *Social Development*, 13, 495-514.

付 記

本研究は、平成23年度科学研究費補助金基盤研究 (B)「関係性攻撃と心理社会的適応との関連についての生涯発達心理学的研究 (課題番号: 22330187, 研究代表者: 濱口佳和)」の助成を受けて行われた。また、本研究の一部は、日本教育心理学会第54回総会 (琉球大学) にて発表された。